

## 特別優秀賞

### 背中という言葉

千葉県 新松戸西小学校 五年 石山美乃莉

それは、わたしが自転車で出かけようと、マンションの自転車置き場に行ったときのことだった。小さな女の子が自転車を出そうとしていたが、おくに入ってしまった、大きな自転車が道をふさいでしまっていたのだ。女の子の背中は、

「助けてほしいな」

と言っているような気がした。わたしは、少しはなれたところにあった自分の自転車のカゴに荷物を入れた。女の子は、わたしに気づいた。でも、なにも言ってはこなかった。だからわたしも、

（どうしようかな。）と思った。

そして迷ったけれど、女の子に、

「自転車出せないの？やっあってあげようか？」

と話しかけた。すると女の子は、少しはずかしそうに、「うん。」とうなずいた。わたしは、大きな自転車をよせて、その女の子の自転車を出してあげた。女の子は少しうつむいて、でも少し笑顔で、「ありがとう。」と言って去っていった。なんだかこっちも少しはずかしいような、くすぐったいような気持ちになった。

そのときだった。いつから見ていたのか、同じ階の知りあいのお婆さんが、

「みーちゃんえらいわねえ。お姉さんになって。あの子みたいに小さかったのに、みーちゃんもそんなことしてあげられるようになったのね。」

と言ってくれた。だれも見えていないと思っていたから、一気に顔が熱くなるのがわかった。

自転車に乗りながら、小さいころわたしも助けてって言えないことがあったな。あのときも、わたしの背中に「助けてほしいな」って書いてあったのかな。女の子、笑っていたな。わたしもそのあと、ほめられて笑ったな。いろんなことを考えていた。でもその考えている顔は、やっぱり少しうれしくて笑っていたのかもしれない。

わたしは、家に帰って、母に今日のできごとを話した。母は、

「へえー。いいことしたじゃない。その子の背中に気づいてあげることができたのね。みんな順番なのね。小さいときにはできなくて、助けてもらったことも、大きくなってだれかにしてあげられるっていいわね。」

と言ってくれた。

背中に気がついてあげられる人。その母の言葉がわたしの心にささった。今日わたしは、女の子の背中という言葉に気づいて、そしてまよったけれど、声をかけて本当に良かったとあらためて思えた。そのとき、女の子も、わたしも、それを見ていたお婆さんも笑顔になれたからだ。そしていつか、小さな女の子が大きくなったときに、同じようにだれかの背中に気づく日が来るといいなと思った。そしてわたしはこれからも、だれかの背中に気づいてあげられるような人でありたいと思う。